

愛知県心のバリアフリー推進事業

# MO-YA-COアートプロジェクト2012 workshop&talk

～アートでひらく・ひろげる3日間～

## 記録報告集



作品制作：生活介護事業所「オリーブ」（NPO法人ホバイが運営）美術部メンバー

## Workshop&talkを終えて



「心のバリアフリー推進事業」として行われた今回のワークショップとそれに続くトークは、簡単に言えば“障がい者に対するイメージ（障がい者像）＝バリア”が私たちの心にどの様に存在し、それをどのように解放（フリー）するかがテーマでした。まず、ワークショップと言う非日常的な空間では、誰もが新しい体験を共有することができるという視点に立ち、障がい者とサポートする側という普段の立場ではない関係性で創作に取り組むことで、お互いの特徴が発揮され、新しい一面が確認できました。それはもちろん、障がい者の意外性や奇抜さであり、アートの才能でもありました。

そしてそれらは確実に子どもを始めとした参加者に波及し、お互いを刺激し合う普段とは違う“心の交流”が図られたと思います。

続くトークでは立場の異なるゲスト陣から「障がい者のアート」の捉え方、評価の仕方、伝え方が多角的に語られ、制約時間の中からも、障がい者のアートへの期待の高まりが強く感じ取れました。

「アンテナ張ってる人同士で繋がって面白いことやろう!」。会場から上がったこの一言が、私たちの背中を強く押してくれました。

NPO法人ポパイ理事長／山口未樹



開催日時：2012年12月6日(木)・7日(金)・8日(土)

開催場所：愛地球博記念公園内 地球市民交流センター 体験学習室2  
(愛知県長久手市茨ヶ廻間乙1533-1)

内容概略：12月6日(木)・7日(金) アーティストによるワークショップ  
8日(土) ワークショップ作品展示、体験ワークショップ、トーク

主催：愛知県（健康福祉部障害福祉課）

企画統括：NPO法人ポパイ

企画運営：office tre punte

# Workshop 1

12月6日 (木) 11:00~14:00

## 『ピッポリーノ市のクリスマス』

アーティスト：トミー・オオヒラ（画家）

参加施設：NPO法人ポパイ「オリーブ」  
社会福祉法人無門福祉会「青い空」  
NPOかわせみ「かわせみ工房」

参加人数：50名

1

WSのテーマは、創作絵本『ピッポリーノ市のクリスマス』。会場には段ボールで作ったツリー5本とトミーさんによる壁画を設置し、クリスマスムードを演出。絵本から飛び出てきたようなキラキラわくわくする世界を再現しました。

2



トミー・オオヒラさん登場！ご自身とスタッフが絵本の登場人物「ルナ君とロロ君、天使さん」に扮し、寸劇仕立てで絵本を朗読。参加者はトミーワールドに引き込まれ、絵本の世界に浸っていました。

3



朗読の後はクリスマスソングを唄い、楽器を持ってみんなで演奏。ベルや太鼓、タンバリン等それぞれの楽器でリズムを取ったりいろんな音を聞いたり、自由に演奏を楽しみました。

4



午後からはクリスマスの工作にじっくり取り組みました。色紙を丸める、毛糸を編む、直接ツリーに描く等、参加者がそれぞれ好きな表現方法でツリーに造形物を飾り付けし、素敵なオリジナルツリーができました！

5

サンタクロースが登場し、全員にプレゼント（トミーさんのポストカードとオリーブのクッキー）を配り、最後には会場に雪が舞ってみんな大喜び。楽しい『ピッポリーノ市のクリスマス』の世界が終了しました。



### ～ワークショップを終えて／トミー・オオヒラ～

私のライフワークのひとつに、ブリリアント星スターレインボー地方、ピッポリーノ市という所を舞台に、宇宙時代の新感覚少年ルナ君とロロ君が活躍するお話があり、私はそれを創り続けています。そのピッポリーノ市を舞台にワークショップをさせて頂いたことは大変楽しいことでした。しかし、残念であったこともあります。それは準備をする時間が足りなかったということです。ワークショップを作り上げていく過程も十分に楽しみ、それに関わるスタッフの皆さんも楽しみながら完成させていくというスローで穏やかな時間の流れ。それが宇宙の自然の流れと溶け込んで進行していく時、私は心からの心地よさを感じ、そして持てる力、才能も自然に花開いていきます。実際のワークショップでは、音楽（楽器演奏）を一緒にしたことが非常に良かったです。言葉を必要とせず楽しめる音楽の可能性を感じました。また、後半に実施した創作ワークショップでは、障がいのある方の思わぬ方法や感性が垣間みられました。全体として皆さんに楽しんでもらったこと、それぞれの立場でWSを通じていろんな気づきがあったであろうと思われま。この機会を得たことを大事にして次へつなげていきたいと考えます。

# Workshop2

12月7日 (金) 11:00~14:00

## 『爽快な帽子屋さん』

アーティスト：えこども（北山美那子、本田佳世）

参加施設：NPO法人ポバイ「オリーブ」  
社会福祉法人無門福祉会「青い空」

参加人数：40名

1



えこどもによるワークショップのテーマは『爽快な帽子屋さん』です。まずは、寒さで固まった体をほぐすことから始めました。軽く体を動かした後、バケツに用意されたのは、なんと足湯。ジェル状の楽しい触感の足湯に足を浸して、ほんわかムードになりました。

2



床にごろんと横になってマッサージしあったり、ぎったんぱっこんしたり、手押し車をしたり。終わる頃にはみんなの顔も体もすっかりほぐれました。

3



お昼休憩の後は、マッサージ用のセサミオイルで頭皮のマッサージ。頭の緊張が取れ、親密さが増しました。

4



さて、いよいよ帽子づくりの始まりです。その日の朝に採ったばかりの草花や木の枝、野菜、布や毛糸など、色とりどりの素材が並びました。

5

洗濯ばさみやテープなど、簡単な方法で固定しながら帽子を作っていきます。個性的な帽子がたくさんできました。完成した帽子をかぶった人たちは、ちょっと誇らしげな顔です。

6



帽子ができたら、外の広場でパレード！晴れやかな笑顔で練り歩きました。



### ～「爽快なぼうし屋」ワークショップの行方／北山美那子（えこども）～

初めての人や場所は緊張する。

弱さがあればより緊張する。

緊張は足が冷え頭がほてる。

逆転の発想で、足が温かったら緊張しないし、頭も爽快でいられるかもしれない、そう思い初めに冷めにくいゼリーの足湯をしてもらった。すると、本当に一気に皆が近づいた。ずっと昔から知っている子と再会したみたいな空気。

ビニールシートをしく準備運動としてシートをみんなで息を合わせて上下させ、みかんや植物が空を舞う。心も舞う。

初対面の人の頭や手をアーユルヴェーダのごま油でマッサージしあいっこできるほどの距離。

日頃怒りを飲みこみやすい介助者自身が弱さのある人に癒される仕組み。森から朝どりの新鮮な植物たちを頭に飾りあい、

オーダーメイドの帽子屋さん。風が爽やかに吹き抜ける帽子をかぶり、一本のもみの木のように皆で抱き合った。

# Workshop3

12月8日（土） 10:00～15:00

参加人数：117名

2日間のワークショップでできた作品を展示した空間の中、誰でも参加できる2つの体験ワークショップを行いました。

1つは、クラフト紙の紙袋を使って帽子を作るワークショップです。紙袋に直接絵を描いたり、折ったり切ったり、草花を飾ったりなど、自由な帽子づくりを楽しみました。紙袋の帽子をかぶると意外にも快適。うれしそうに帽子をかぶって帰るみなさんの姿が印象的でした。

もう1つは、特大のダンボール製クリスマスツリーを飾り付けるワークショップ。ダンボールで作ったオーナメントを飾ったり、絵を描いたり、毛糸を巻きつけたりして、たくさんの人の共同作業でにぎやかなツリーができあがりました。



# パフォーマンス

12月8日（土） 15:00～15:30

出演：えこども  
(北山美那子、本田佳世)

出演は7日のWS講師としても参加していただいた「えこども」のお2人。会場には白い布が丸く敷かれ、そこに同じく白い衣装をまとい、手にバケツを持った2人が現れると場の雰囲気が一変しました。一体、何が始まるのだろうか？と期待が高まる中、えこどもの2人は淡々と話し始めました。「最近、何かについて怒ったことはありますか？今日はその怒りを私たちが聞いて、代弁します」。参加者のひとりが、怒りについて口にする、それをえこども美那子さんが復唱し、次に自分の頭をバケツに突っ込みました。バケツの中には緑と朱色の色水が入っています。そして、美那子さんは髪に色水をたっぷり含ませ、まるで筆のようにして布に描き始めました。怒りを叫びながら。これには会場の参加者も圧倒されました。その後、会場の数人から怒りを聞き出し、同じように布に描きつけます。

2人交互にその行為を繰り返し、パフォーマンスは終了。敷かれた布と衣装には、緑と朱の模様で染まっていました。私たちが感じている怒りという感情をアーティストが別の形で昇華（表現）し、会場に居合わせた全員が共有することで負の感情であるはずの怒りはいつしか別のものになっていました。



# Talk 1

12月8日(土) 16:00~16:30

## 「障がい者アートとは？～その魅力と可能性」

ゲスト：鈴木敏春

(美術批評／NPO 愛知アート・コレクティブ)



### ゲストプロフィール

#### 鈴木敏春

1951年東京生れ。  
1970年「漆黒の馬」編集委員会、1974年～79年「8号室」運営委員会・名古屋美術家共同組合、90年美術雑誌『美術手帖』展評など各誌に執筆。91年名古屋市文化振興事業団『エコロジーアート展』企画、美術大学非常勤講師などの傍ら多くの企画展、野外展を行う。  
2002年NPO愛知アート・コレクティブ設立。ボードレスアート、ライフレビューアート(回想法アート)を提唱。最近の主な企画／2009年「境界なきアート展」豊川市桜ヶ丘ミュージアム、2009年～2010年「小牧アートコミュニティ」独立行政法人福祉医療機構助成事業など。  
現在、三遠南信地域応援誌「そう」に美術作家論を連載中。  
2012年あいちトリエンナーレ地域推進事業「現代美術inとよはし」アドバイザー、NHK豊橋文化センターで「アート敗策・美術館巡り」講師なども務める。

### ゲストトーク要約：

座談会に先立って、美術評論家の鈴木敏春さんをお招きして「障がい者アートとは？～その魅力と可能性」と言うテーマでお話を頂きました。

まず始めに「障がい者アートの定義」について鈴木さんは「問題が多い部分もあります」と指摘した上で、すべての作品を「障がい者アートと一括りにしてしまう」ことへの疑問を投げかけました。この辺りについてはこの後に続く座談会でもトークゲストの方に触れていただきました。

改めて、鈴木さんから東海地方を拠点に活躍されている作家(障がい者)の紹介がありました。1970年代から現在に至るまでの複数の作家の作品を写真を交え紹介し、その作品にまつわるエピソードや、作家の独特の視点と感性、モチーフの面白さなど、長きにわたり実際に作家及び作品に触れてこられた交流と経験から、無数の興味深い話が頂けました。中には海外にまで活躍の場を広げている作家もみえ、障がい者アートへの注目の高まりと、今後ますます作家の皆さんの活躍が期待されます。

併せて障がい者施設でのアートの取り組みや、障がい者アートに関するこれまでの展覧会や実際の来場者の反響なども聞け、過去から現在に至るまでの東海地方のアートの流れを概観する良い機会となりました。



## 座談会

「あいちに障がい者アートの美術館をつくる?!」



## トークゲストプロフィール

### 今泉岳大

1982年愛知県生まれ。武蔵野美術大学卒業。  
BarkART1929を経て2010年より現職。主な論文に「私という亡霊を集める欲望 -ミュージアムという制度が隠蔽してきたもの」(2008年)。主な展覧会に「ART BRUT JAPONAIS」(高浜市かわら美術館/2012年)、「誰もいない世界」(高浜市かわら美術館/2012年)がある。

### 萩野佐和子

愛知県生まれ。1988年 名古屋芸術大学美術学部洋画家卒業。  
1994~1995年 名古屋市文化振興事業団主催・海外研修(イタリア)  
1991~1997年 名古屋芸術大学版画コース非常勤講師  
画家として名古屋、東京、海外などで個展やグループ展に多数参加。  
〈障がい者に関わる活動〉  
1988~98年 愛知県立名古屋養護学校にて非常勤講師を勤める  
1989~95年 名古屋市中村区やまびこ共同作業所にて美術クラブの講師  
1993~2000年 名古屋市中区むつみグリーンハウスにて美術クラブの講師  
1999~ 新城市スペシャルキッズの美術講師  
ぼこぼこ教室と命名し、豊橋市と新城市で教室を開く。  
2009、10、12年 豊川市桜ヶ丘ミュージアムにて、ぼこぼこ教室の生徒とプロのアーティストとの企画展を実施。

## トークゲスト:

今泉岳大(高浜市やきものの里かわら美術館学芸員)

萩野佐和子(画家)

斎藤まこと(名古屋市議員)

村林真哉(まつさかチャレンジドブレイス希望の園 園長)

司会進行: 山口未樹(NPO法人ポバイ代表)

### 斎藤まこと

1960年四日市生まれ。小・中学校は施設暮らし。大学卒業後はバイト生活。障害のある人ない人が地域の中で共に生き共に働く活動をしている。「わっぱの会」と出会い、障害者運動に取り組むようになる。1986年わっぱの会で働き始める。同じ頃「誰もが生きられる街と交通をつくる会」を結成し活動する。1990年名古屋市議員補欠選挙(千種区)に立候補。政令指定都市発の車いす議員となる。その後、落選している間は、わっぱの会で障害者の生活援助の仕事をする。1999年に再び議員となり現在に至る。

障害ある人となない人が同じ風景に溶け込むことはできないかとの思いをもって「共走リレーマラソン」(1991年~1995年)を行う。

「障害者アート」ということで括られることがないように表現するにはどうしたらいいかということに関心があり、以下の構成や制作、参加を行う。

1999年「話す演劇/聴く演劇」(構成・出演)(愛知芸術文化センター)  
2000年「身体表現と演劇」に参加(構成・出演)(愛知芸術文化センター)  
2008年「ファン・デ・ナゴヤ美術展2008」に出展(構成・制作)(名古屋市民ギャラリー矢田)

2008年「ウチナル形-身体的展開としての表現-」(一部の作品を構成)(愛知芸術文化センター・アートプラザ)

### 村林真哉

1962年三重県生まれ。大阪芸術大学卒業。  
障がいのあるアーティストのプロデュース、展覧会支援など、マイノリティの方々と芸術・文化活動を支援、共に活動している。2007年から『真才きらめき!展~障がいのあるアーティストたち~』(芝公園・増上寺)を企画・開催。自由芸術教室HUMAN・ELEMENTも主宰する。  
マイノリティミュージシャン、アーティストとのコラボイベント、★バイタリ!松阪人ショーの実行委員長を務めている。  
知的障がいのあるバンクヴォーカリストを中心としたバンド、UKウッキーと全員小4のロックバンド、エンジントラブルの作曲とプロデュースユニヴァーサルデザインバンド、ダッキーアクソンのメンバーでもある。



## ——「あいちに障がい者アートの 美術館をつくる?!」——

山口 『あいちに障がい者アートの美術館をつくる!』というテーマで、様々な方面の方から意見を頂きたいと思います。現場で携わられる方、美術専門の方とお話していると、“拠点になるものがほしいよね”という意見が出てきます。最終的にそこへお話がもっていかれたらと思いますが、それだけにとらわれず色々お話ししたいと思います。では、斎藤まことさんに先頭バッターをお願い致します。

斎藤 私がなぜこのラインナップに並んでいるか、場違いな気もしていますが、私も演劇をやったり、障がい者と一緒に展示もやったこともあります。たまたま、ポバイの方と知り合う機会があって声が掛かり、今日出てくることになりました。今日のテーマなんですけども、僕なんかは「障がい者アートの美術館」なんていわれると、行きたくない感じになっちゃいます。私の感覚では、そういう風な言葉に抵抗があります。私は障がいをもつ人も、もたない人も一緒に地域の中で生活をしていく・働く“わっぱの会”というところで活動をしているのですが、障がいのある人・ない人がどういう形で一緒に地域の中でやっていくかを考えた時に、“一緒に”といっても、やっぱり違いがあるわけです。違いは違いとして個性、違いを強調するということは、一つ重要なことなんですけども、その一方で“混ざって分らない”っていうことも重要なことで、障がい者が強調されるっていうのは比較的やり易いんですけども、混ざって分かりにくくなるというのは非常にやりにくい。方法論が分かりにくく、どういうことができるかなと常に考えています。

障がい者の人達と一緒に色んなことをやっても楽しいことは少なく、大変なことが多い。しかし一方で、楽しいことや身の毛のよだつようなこともたまに起きて、それは私にとっては重要で、その素晴らしい経験を共有したいし、それに基づいて色々考えたい。表現活動は共有する一つの方法論だと思い、関心をもっています。

「障がい者アート」というのに私が否定的な反応になるのは、今日も中学生の描いたポスターが貼ってあって（同会場内のパネル展示）、「誰でもできる」というようなことが描いてあったりするんですけども、ああいうものを見ると私はげんなりしてくる訳ですね。「誰でもできる」って言われたって、「出来んもんはできん」とか「いや、出来るとか出来んか、やってみなきゃ分かんない」という感じがあるわけなんですけども、障がい者の人達と一緒にという、やればできるとか、頑張っって一緒にやろうとか、一緒にやるとほのほのした雰囲気になるとか、そのようなことを何とか排したいと常に思っています。そういうものを排して何か表現できないかなと考えているのが一点。

それと、私が一緒に住んでいる仲間が毎日こんなもの作っているんですけども（持参した新聞紙の作品を見せる）、私にとっては凄いなと思うわけなんですけども、作っている本人にとっては新聞ちぎってリラックスしてる中で作っているだけのことなんです。以前こういうものを集めて展示をしたことがあるんですけども、面白いと思う一方で、何となくこんな勝手に人に見せるような形にしまっていていいのだろうかという後ろめたさがありまして、今日は学芸員の方もみえているのでそのところを後ほど議論できればと。それから、施設などでは絵を描いたり歌を歌ったりしてみえると思いますが、それは表現させているんじゃないかとも思うわけです。自分の心の中から湧いてくるものがアートじゃないかなと基本的に思っていて、私は知的障がい者の人達との関わりが多いのですが、彼らは自分でなかなか色々言えませんが自分たちが何をしているか分からない、その中でそう

いった取り組みについてはいつも考えてしまうところです。ただ、やっぱり表現行為など何かをしないと、障がい者の人達がやってることが伝わっていかないので事実なものですから、どういう方法論がいいかということもいつも考えています。その時にはやはり、言い方は「障がい者アート」ではないと思っています。以上です。

山口 現場では障がい者の人たちが「本当にやりたいのかな」「楽しいのかな」という疑問は常にありますね。更に、アートという専門的な視点や解釈が必要になりますが、三人の方に順番に聞いていきたいと思います。村林さん、どう「これいいね」という作品を見つけるのかなどをお願いします。

村林 基本的にいいねと思うのは、どれだけ自分とかけ離れているか。僕があまり作らない物はいいなと。あと作品を制作してずっと楽しいかと言うと、基本的にですね、考える時間が長かったり寝たり音楽聞いたりしてますね。毎日毎日楽しいわけではない。中には色を付けることが楽しかったり、色づくだけでいいとか、またそれをいいねっていう人も沢山いますけど、僕の好きなものはそういうものばかりではなかったの、その辺は僕がマヒしているのかも知れませんが、ただ、絵を描くとか歌を歌うとか、そういうことだけがアートなのかっていうところがあります。それは、今の現代美術の状況などを考えてもそうですし、うちが小中学校との交流会を年間70回ほどやってるんですけど、そういう中で生まれてくるものは、僕はアートと捉えてるんですね。

山口 今、一番最初に出た「自分とどれだけ違うか」という感覚は面白いんですか？

村林 そりゃ面白いよ。例えばこの新聞だって（斎藤さんが持参した新聞紙の作品を手取る）、新聞ちぎって丸めてこれがなんだって感じかも知れませんが、例えば俺の人生なんだっていうひとっぱいいると思うんですよ。そんな人がこの作品見ると救われるかもしれないし、あるいは全然違うことを考えている人がまた違ったものを感じるかも知れない。自分と違うものを感じるというのもアートの役割なのかなと。

山口 確かに。

斎藤 僕はこれ（新聞紙の作品）凄くいいなと思ってるんですけども、作ってる人が淡々とやって生まれてくる場所がいい。ずっとやってるのではなくて、リラックスしてる時にこれが出来上がってくる。それが単に素晴らしいと感じるんですよ。

山口 同じことをやり続けるのは障がい者の特性でもありますよね。荻野さんはいかがですか。

荻野 たまたま斎藤さんが新聞紙の作品を持ってきてくださいましたが、私が小学校一年生からみて今21歳になる人がいて、出会った頃、新聞紙をちぎってひらひらとただ振っていました。お母さんがとても几帳面な方で、一緒に教室に来てくれるときには、絶対1枚画用紙を描き上げて帰って決めていたんですね。かっぱいクレヨンかなんかで、紙が破れるくらいひたすら描いて、出来上がったからお母さんがご褒美に新聞紙を出す。明らかに新聞紙をちぎってる方が楽しそうで、私はこれを作品にしようってずっと言っていたんですけど、そのお母さんはそういう美術（アートの表現に対する評価）のことを全く分からなくて、多くの方がそうですね。

また別の子は、小学校の高学年くらいからいつも毛糸を教室に持ってきて、一本を細かく裂いてほわほわにするんですね。それをやはりお母さんがご褒美で出



してたんですけども、あまりに美しいものですから、私が企画しているぼこぼこ展に、これをアクリルケースに入れてちょっときれいに並べて出しました。その作品をプロの人にちゃんと写真を撮ってもらってA4サイズのチラシを作ったら、お母さんの意識がようやく変わってきて、息子の毛糸のモニャモニャを作品とでもいいのかな、という変化ができましたね。本人が作品と思って作っていない。母親もアートと思っていない。小学校の先生も施設の人達もほとんどが分かっていない。せっかくいいものはいっぱいあるのに、かわいそうだなっていつも思います。アートを専門にやってる人がその良さを分かってあげないと他に誰が引き出すのかな、と考えながら教室をやっています。

山口 現代アートというのが、さきほどから出てくるんですけども、今泉さん、どうなんでしょう？ 障がい者アートと近いものがあるんでしょうか。

今泉 そうですね。最近では現代美術が非常に広がってきて、日常の何だってアートになるっていう捉え方があるので、そういう社会的な機運が障がい者アートの理解へつながっていると思います。僕の立場から申し上げるのは、多様な個性を面白く紹介したい。本人を痛つけることはよくないと思いますけど、カッコいい、美しいものもいいですが、面白く紹介したいと思います。障がいのある方の作品も、全てがいい作品になるわけじゃなくて、殆どは完成度が低いと思います。半分位しか作っていないものもある。作者が意識しているかしていないかは別として、そういうものをいかに見せるか、いかに紹介するかでいいものになる可能性があると思います。

山口 自分なんかはアートの専門家ではないので、新聞紙を見てもすごく面白いというよりも、やっている様子の方が浮かんできます。現場で日々難しい問題に対応しながら仕事していて、その中でも、内職などよりは創作的なことの方が楽しいんじゃないかという思いで最近取り組んでいるのですが、アートを主にされている希望の園ではどうですか？

村林 僕のところも重度の方が多くて障害程度区分では4、5、6の方が多いです。当然作業的なことはあまりできないのですが、足の不自由な方が空き缶つぶしを任されて朝の9時から3時までやって当時月々1500円、それで仕事ですというね。「それを60歳まで続けるのですか、お母さん」と話すとお母さんも「ちょっと待てよ、うちの息子このままずっとこれをやるの？」と思うわけですね。障がい者年金を権利として受け取っているんで、一般的な労働だけが人間のやるべきことではないというのをメッセージとして出す方がよろしいのではないかな。その人の個性を活かした作品を作って商品として売ったり、ライブなどをやって収入を得る方がいいのではないかな、それが基礎ですね。

山口 斎藤さんが帰られるので、最後に一言お願いします。

斎藤 村林さんの感覚に全く共有するんですよ。こんなこと一生やってられるかっていうところですね。私のところでは重複障がいの方はほとんどいないので、

パンを作ったりして月1万は絶対いかなあかんという目標で仕事しています。何とかして稼げるようにしようとしておりますが、こんなことで一生過ごすのか



という想いは根本的にあって、僕はそこを、障がい者アートでも忘れちゃいかんと思ってるんです。それこそ「ずっとお絵かきやっとなか」になっちゃうわけですから、その思いで活動として作っていかなくちゃいけないなと思っています。最後に、私の好きなシモーヌ・ヴェイユという哲学者がいますが、「人民はパンと同じように詩を必要とする」という言葉があります。「彼らの生活実態が詩であることを必要とする」と言っていて、障がい者が生きているその毎日や、僕だったらこういうことをやっている生活実態そのものが詩のようなものだと思いたい。そういう風にアートに関わりたいし、紹介したいと思っています。ありがとうございました。

(斎藤さんが退席される)

山口 萩野さんは15年ほどアート教室を続けられていますけど、きっかけはどんな風だったんですか。

萩野 きっかけは、こども達が小学校に入って初めての夏休みに何もやることなくお母さん方が困ってしまって、近くの公民館で集まって学童的なことをすることになり、私は名古屋の養護学校を終えて三河の方へ拠点を移したところでご縁で声がかかり、お絵かきっばいことを始めたんです。夏休みが終わったときにお母さんたちから「これからも月1回くらい教室やってくれませんか？」と言われて、お金も頂けるそうだしやろうかなと、そのままずっと続いてきてるっていう感じです。

山口 長く続けていると作品が変化していくと思うんですが、アートをやってこども達が変わったとか、成長したということはありますか？

萩野 私の教室に最初の頃に来ていたのは重度の知的障がいの人達なんですけども、言語がなくて自閉症もかなり重くて、絵を描くところまでいかず、筆と絵具と水入れを出して描くのではなくてバケツの中でくるくる遊んでいたり、サインペンなどを出しても綺麗に色ごとに並べるとかしていました。もちろん何が好きかを尋ねても返事はありません。でも、選択肢を与えました。どっちがいいとか、そうやって回数を重ねていくうちに、表情やちょっとした動きで表現するようになりました。「上手に塗れたね」ってほめると笑顔になるんです。だから、どんな人でも知識と経験で成長していくと思います。そして、親も成長します。子供の成長が親の成長にもつながっています。親子は一体化しているという感じですね。親も「ありのままを作品として認めていいんだ」と考えるようになりますね。

山口 私が思うのは、障がい者アートをどう引き出していくか？ 施設の中でアート活動を取り入れようとしていますが、なかなか落ち着いた活動が出来にくいように感じます。そこへ専門家が入ると変わってくるのでしょうか。また一般的にそもそもアートに関心がなかったり、日常的にアートに触れる機会が少なかったりする人が多いように感じます。今泉さんは美術館で色々な企画をされると思うんですが、その辺りどうですか？

今泉 美術館にどう来てもらうか？ ということですが、それはどうアートに関心をもってもらうか？ につながると思います。アートというのは、言ってしまうと無くて困らないものです。ただ、アートというのは日常生活において異質なものであると言えます。普遍的なものに異質なものが入ると活性化するとも言われています。

村林 今、「アートはなくても生きていける」と言われましたが、本当はそんなことないでしょ。僕はアートが必要だと思いますよ。アートというのは、人間の想像力が生み出すもので、人間はそういう想像力がないとダメだと思う。アートは人を前向きに活性



化させるものだと思います。

山口 今泉さんは美術関係の仕事をしていらっしゃいましたが、こういった障がい者アート活動に興味をもったきっかけはありますか？

今泉 きっかけというのは、学生時代にかなりアウトサイダーアートなんかも学びましたが、実際には世界の色々な美術館を回っていた時に、障がい者アートに出会いその世界に魅せられました。この辺り（障がい者のアートが一般的に展示されていて、見る機会がある点）は日本と違います。あまり海外では障がい者に対する壁がないのかも知れません。芸術的な価値も認められているようです。障がい者アートの魅力を簡単に言えば自由で純粋で人の心を動かします。例えるとレオナルドダヴィンチは、料理で言ったら“フルコース”で障がい者アートは“ぬれせんべい”のような感じでしょうか。障がい者アートは素朴で美しい。その良さが広まれば、多くの人の日常が楽しくなるでしょう。

山口 この座談会の前にえこどものパフォーマンスがあったのですが、見られた方はどんな印象だったんでしょうか。しぶきが飛び散ると聞いていたので皆で養生シートを持って見たんですが、僕は以前にえこどものパフォーマンスを見ていましたし、素直に面白



いなあと感じたんですが、驚かれた方もみえたと思います。しかしながら、それがアートの持つ力、日常を突然変えてしまう力だと感じました。それでは会場の方にもお話を伺っていきましょう。鈴木さんは長らくアートに関わってみるんですが、なぜ障害者アートなんですか。

鈴木 アートの流れが現代アートも含めて、ボーダレスになってきていると言えます。ですから、先ほどのようなパフォーマンスも理解されたり、広まりつつあると思います。ある施設に教えに行った際、施設側が用意したものが写生でした。真ん中に花を置いて画板を置いてクレパスなどで描くというのを前提に準備されたんですけども、重い障害の方が10人ほどのメンバーで、言語障がいがあったり、まともに座ることができなかったり、コミュニケーションも難かったんです。福祉とアートをやっている関係者の付き合いやコミュニケーションがほぼ成立していないと感じました。最近心の奥に思っていることでもあるんですが、それでもそんな活動を重ねていくうちに、だんだんとテーマの一つとして「記憶」というのが出てきました。彼らの中の色々な思い出がアートの表現の一つのキーワードになるんじゃないかなと感じています。思い出がベースになった作品としては、先ほど（座談会の前のトークの時間）紹介した雑誌の切り貼りもそうです。斎藤さんが持ってこられたような新聞紙の作品はホープっていう企画展で出されています。村林さんのところも参加されている境界を超えるアートは、作家とのコラボレーションのような感じでやられている。これは随分前のものですけども、今時代は変わってきているから、福祉とアートがコラボしていく内容が出てくればもっといい形になっていくのではないかと思います。

山口 鈴木さん、このままの流れで現在の国内のボーダレスアートの流れを海外も含めてお話頂けますか？

鈴木 海外のことは知らないで国内のアウトサイダーアートについてですが、まず山下清が出てきますよね。その時代は、障がい者の人がこんなに素晴らしい絵を描くって見世物的な評価が当たり前で、そうやって展示されていました。それを画廊とか画商に気に入られると作品が流出してしまうんですね。本来は、今日のテーマである美術館に収蔵され、作品をいつでも見ることが出来る状況に

作り変えないといけない。アウトサイダーアートも見世物的なものはアートとしては否定されてしまうし、障がい者の人が描いた絵ということで安っぽい評価を受けてしまうんでしょね。今は障がい者のアートにエイブルアートとかいろいろな呼び方がついていますが、あくまでも発生源が違うというだけで、取り上げる内容は近いと思います。そうしたものがもう少し整理されて（収蔵されて、展示されて）いくと、これからもっと障がい者アートの評価も高くなるでしょう。

山口 ありがとうございます。では今泉さん、海外の流れについて少しお話しいただけますか？

今泉 この分野はもちろんヨーロッパやアメリカが先進国で専門の美術館があります。障がいのある人の作品だけを展示する点が日本と大きく異なります。日本も滋賀・京都・広島・高知に障がい者アートの美術館がありますけども、結構緩くて、障がい者だけでなく、一般のアーティストとコラボレーションしていくような美術館を作りはじめている。それは、緩いことで可能性がある、いいことだと思います。

山口 村林さんも海外と交流がありますが、いかがですか。

村林 ぶっちゃけ、海外は分かってもらいやすいし、買ってもらいやすい。東京なんかは受けるんですがね、日本には基礎が無いんでしょうね。海外は観光の目玉として現代美術館作って年間100万人くらいは入りますからね。日常と違う体験がしたい人が多いんだと思います。

山口 村林さんのところは売りに出されているというお話でしたが、荻野さんの教室でもかなりの数の作品ができてくると思うんですけども、どうされてるんですか？

荻野 教室は月に一回なものですから、三か月に一作品作るくらいのペースなので、そんなに沢山できるものではなくって、その作品は持って帰ってもらうのですが、私は教室に始めて見えたお母さんに必ず「持ち帰ったら必ず家の中に飾ってください」と言うんですよ。ただ画紙で留めちゃうんじゃなくて額に入れて家の中に掛けて、「今日描いたよ」というのを家族に見てもらいたい。そうすると本人も喜ぶし、それをしてほしいっていつも言うんです。そうしていくうちに、オブジェを作ったり、インテリアとしてお母さんが工夫してくれたりして、親子で作品を楽しんでくれるかなって思います。お母さんは大抵、残していらっしゃると思います。

山口 作品は基本、本人のものになっていくんですね。作品をもとにしたポストカードなんかがあったんですが、そういったものは販売されているんですか？

荻野 一番年上の人たちが養護学校を卒業して社会に出たり施設に入ったところなんですけど、今回始めて、ぼこぼこ展で卒業した人のみカメラマンが撮影してくれたものでハガキを作って、売るところから来場者に無料で配りました。ただ、一人亡くなった子がいて、その子の作品をみてもらうためにTシャツを作ったのですが、それはよく売れました。

山口 先ほどの鈴木さんの映像でも紹介されていましたが、会場にお見えの藤花荘さんも作品が大量にあると思うんですが、どうされていますか？

藤花荘 平日毎日作業しているのでどんどん作品がたまっていって、今倉庫がいっぱいな状態です。作品を購入したいというお話も沢山頂いているので、今後は作品の販売を考えていきたいという現状ですね。



山口 どこで販売するといいいんでしょうか？

藤花 荘 施設から発信していきたいところなんです、今は大々的に会議とかでもちかけるなどはしにくい現状です。もし可能であれば、表題にあるような美術館とまではいなくても、施設ではない第三者的な場所があると、作品を販売していけると思います。でも私は、販売の利益よりも作品の良さが一人でも多くの人に伝わることの方が大事なんじゃないかなという想いがあるので、そこを広げていけたらもっとやりやすくなるのではないかと感じます。

山口 中立的なところを作っておいて、そこで発表や販売をする方がいいということですね。施設の中での評価がしっかりされてなかったり、理解が得られ難いわけですね。

藤花 荘 「幾らでほしいという人いましたよ」とか言うと、「そんな高い値段で？ もっと安くしてほしいじゃない？」という意見がすごくあるので、価値の捉え方の差が激しくあるんじゃないかという印象が強いです。



鈴木 実際、美術作品のコレクターの方が、先ほど映像で紹介した置物の作品をウン十万で欲しいという話もあったりするんですね。美術館には本来、作品を保存して展示するそういう機能があるので、障がい者アートの美術館にも作品収集だとか、そういう機能があってもいいんじゃないかって思います。ただ、アールブリュットっていうか、先ほど今泉さんが言われたけれども、あちこちにアウトサイダーアートの美術館ができてはいるんですけども、流れとして見ると、展示されている障がい者アートの作家がほとんど一緒なんです。ローカルに美術館ができるんだったら、地域の作家ももっと現れてもいいんじゃないかなと思います。そうすると、特色のある美術館ができるんじゃないかなと思いますけども、アールブリュットに関して県が独自で4,000万円位の予算をもって作品の販売も含めたマーケットを作ろうという動きもあります。画廊をけなすわけではないんですけども、そういうところにおいて販売すると、作品が流出してしまうという危機感があります。そうなるとなかなか見ることができないし、いい作家が出てくる可能性が失われてしまうんじゃないかと思っています。

山口 今回のワークショップに参加いただいたんですが、青い空さんでもかなり作品があると思うんですが？

青い空 日々、販売できる機会があったらいいなと思いながらやっています。小さなところや施設内ではなく、発表できる場で販売していく。でも、広めるっていう意味では大事だと思うんですけど、どんどん出していくっていうことに対して先ほど鈴木さんがおっしゃっていた危機感があります。やはり、そこには人の価値とか、そういったものを十分につけていく、我々が守っていく。どんどん安いお金でもいいから出してしまえというのじゃなくて、その人が時間をかけて

作っている作品を僕たちは傍で見てるので、その人の作品の貴重さとか、そういったものを守っていきながら、十分話し合っ出ていくことが必要かなと思います。ある程度、例えば愛知県なら愛知県で共通したルールみたいなものもあつたらいいんじゃないかなと考えます。

今泉 もっと作品が表に出て、商品としても売れて広まっていくというのはいいと思いますけども、僕が思い描くアウトサイダーアート・障がい者アートっていうのは、非常に聖域で、サンクチュアリだと思っています。今の既存のマーケットみたいなものに入っていってしまうと普通のアートと同じようなになっていってしまう。果たして、今の美術の業界に入っていくって言うことが、本当にいいのかどうか。本当に彼らのアートのためだろうか、っていうのは非常に考えるべきことかなって思います。

ただ、売ればいいのではなくて、そうすると美術館やギャラリーじゃなくていいかもしれない。もっと別の物かもしれない。この東海地区にも前例が幾つかあるので、その状況をみながら、勉強しながら何か良いものができたらいいなって。

山口 作品を見せる場所、発表して評価をもらうというのは、いづれにしても必要なことだと思うんですね。荻野さん、特定の場所で障がい者のアートに絞って見せるっていうことに対してご意見があればお願いします。

荻野 障がい者の人って凄く差別をずっと受けてきているので、あえて障がい者アートの美術館みたいなのを建てて、これ以上差別をつくらなくてもいいんじゃないかって思います。例えば、愛知県美術館に空いているスペースがあると思うので、そういうところで企画の部屋みたいなものを作っていただいて、美術館に来ていたお客さんについて流れで観てもらえるっていうのはどうかなって思ったんですが、ただそうすると、スーパースターしか登場できないと思うんですね。私の教室に来ている子ども達なんかは出場がないと思うので、だったらそういう美術館を建ててもいいかなって思うんですが、しかし、障がい者専門ではなくて…アーティストと一緒に展示会ができる、そういう交流できる場所がいいと思います。それで、ワークショップを絶対どこかに設けてほしいなと思います。といいますのは、4年前にデンマークに行った時に、ルイジアナ美術館というすごく良い現代美術館がありまして、すごくいいコレクションが入っているんですけども、地下の2階で子ども達がワークショップをやっているんですけど、上で見たジャコモッティの大きな作品のレプリカがそれぞれ机の上に置いてあって、子ども達がそれを見てそこからイメージしたものを作っていくというものでした。こんな素晴らしい環境で育ったら将来どういう風になるのかなって思いました。そういう場所を作って、アートを見て障がい者の子どもも健常者の子どもも同じ輪で作品を作る。何ていうのかな、最初からボーダレス、精神的に。そこから、もっと底辺を作るべきだと思います。

山口 村林さんのところは、もうすでに発表の場もあり、毎年のように企画や販売も行われていますが、方法や秘訣を教えてください。

村林 現地のギャラリーや美術館に評価をもらっている訳ではないので、今の段階は草の根的にやるだけなんです。今泉さんに聞きたいんですけども、海外と日本では障がい者に対する捉え方が違うんじゃないかと思うんですけど、日本での障がい者っていう言い方も非常にネガティブだと思うんですけど、海外でハンディキャップと言うのはネガティブに捉えてないように思うんですが。

今泉 日本でアウトサイダーアートという精神障がい者の作品だと思われがちなんですけど、海外でアウトサイダーアートっていうと、例えば刑務所から出てきた人の作品も含まれる。必ずしも、精神障がいとかばかりではなく、変わり者とかそういった評価を受けている人の作品もアウトサイダーアートに含まれます。海外だと電車の中で独り言を言ってるおじさんとかも一つ



の表現活動と捉えたり、そういう周囲の環境からアートの的なものを持ち寄って集まっているような感がある、アウトサイダーアートの枠がすごく広い、そういう印象がありますね。でも、日本で障がい者アートっていうと、本当に健常者と障がい者の線引きが強い。

村林 (海外では) 特殊な才能がある、みたいな捉え方ですか？

今泉 はい。無意識とか、そういうところに訴えている感じが多い気がします。

村林 そういう中で議論すべき対象にもなり、成立していくわけですね。

山口 障がい者に対する差別的な捉え方というのは、実際に施設で地域の人と何かを一緒にやりましょうという時、途端に立ち足はだかる大きな壁ですね。ずっと昔から日本はそうだったのかなという気はしています。簡単にそういう差別がなくなるかという、それは難しいのかなという気がします。

北山 山口さん、私も話していいですか？えこどもの北山です(聴衆の中から、パフォーマンスのアーティスト北山美那子)。やりたいことやればいかなっていう気がするんですけど、ゴッホも山下清も、やりたいことやってただけだったかもしれないし、それを理論づけたのはお金をそこにくっつけた誰かの仕事だったかもしれないし。

私も普通なら子育てしているはずなのに、食紅調合したり、全然違うようなところにもすごいアドレナリンが湧いたりして、それがなくて生きていけない人っていうのも、やっぱりいるんだなと。ご飯食べて、仕事をしてお金があれば生きていけるっていうけど、ゲームしたり漫画読んだり(の過ごし方)だけでは満足できないところがどうしても人間にはあって。

絶対にコレクションする必要があるんだろうかって思う。コレクションしたいっていうのであればやればいいし、美術館に行きたいっていう人がいたら美術館に行ったらいいし、私は、美術館よりも路上でワーって叫んだりとかした方がいいような気がしたらそこでやるだろうし。各自が自分の頭と体と相談してやりたいことをやればいい。

差別されるとか地域の人とのノリが悪いっていうのは、障がい者がどうか関係なくて、やっぱり嫌な人は嫌だし、感じ悪い人は感じ悪い。どこへ行っても、どこの施設へ行っても相性はあるものだし、社会の縮図みたいなものが出る。その中で、言葉でうまく発信できない人が(発信したい気持ちを)抱えているとしたら、色々な人たちの力を借りて、表現しやすいようにする環境作りはもちろん必要だと思うんですけど、お金のことをそこに付け加えるのは、施設は施設として福祉事業でのお金が動いてる訳だから、そこはうまく切り離せないのかな、日々の暮らしの中の衝動みたいなところをうまく聖域として守れないかな、という風に思う。そして、小さな地域のつながりにこだわらず、世界のとんがってる、アンテナ立ってる人とやればいいし、そういう人同士を結びつけば、この時代、もっと面白い。私と山口さんみたいにアンテナ立ってる人同士でやればいかなっていう気がするんですけど、そういう人達は引き寄せられてくると思うので。

山口 そうですね。ちょっと楽になりました。ありがとうございました。藤花荘さんも施設内での困難さを飛び越しちゃえばいいんですね。アンテナ立ってる人たちが今日集まってきてこの時間が持てると思うんですけど、またここに色々なチャンスが転がっている気がします。具体的に場を作る。障がい者の方達が作った作品を展示する具体的なアイデアなどを、鈴木さん、トリエンナーレに絡めたらどうかっていうお話ですが。

鈴木 あいちトリエンナーレの話なんですけども、地域の問題などを取り上げて頂けたらと思います。都市の祝祭というのであれば、地域には色々な方がいらっしゃるって、お年寄りから障がい者の方もホームレスの方もいらっしゃる。祝祭としての都市というイメージみたいなものを持とうとしている時に、やはりもっ

と障がい者とか色々な福祉関係の問題のようなこともアートとして取り入れてもいいんじゃないか。推進室の方ともお話したことがありますけど問題意識を持ってやられてる方が多いので、新しい動きとしてやっていけばいいのかなと思います。

山口 時間もそろそろ迫ってきているので、会場の方から質問やご意見等があればお伺いしたいんですけども、(会場から手が上がる)はい、それでは大久保さんをお願いします。

大久保 私はたまたま長者町の街づくりに関わってやっています(まちの緑側育み隊)。長者町にアートラボあいちっていう県の施設があるんだけど、そこを僕もたまに覗きにいくなんだけど、いつも県芸などの学生さんの展覧会ばかりやっている。

亀山 (office tre punte) 補足しますと、大学と連携してやっているんで企画展示は学生が中心となっています。

鈴木 アートラボあちは、県内の芸大・美大4大学が家賃を払って運営しているんで、学生の発表の場になっているのはそういう理由です。もっと違う使い方があっていいだろうと思いますが。

大久保 県美の企画展で障がい者アートと呼ばれる作品も一緒に展示するのはどうだろうか？

今泉 知り合いの関係者に伝えておきます。

山口 大久保さん、なんだか実現しそうですね。ありがとうございました。それでは最後にお一人ずつをお願いします。

村林 作品を美術館で展示したり売るとかいう概念自体が古いていうのもあるんですけども、美術館があるという前提で言うと、美術館っていうところじゃなくて私は路上やりたいのよっていうのも、どこかで成立させていくってのもあった方が世の中に響くかなと思います。それが正しいのか間違ってるのか分かりませんが、一つドーンと基礎的なものがある方が、それにNOって言える、というところで盛り上がると思います。

荻野 私がみているこども達はスーパースターにはなれないかもしれませんが、光を当ててあげたい。私の方が彼らから学ばせてもらっているんで、アートを通して彼らの存在が地域の中で認められるようにアーティストが仕向けてあげるのいいかと思います。近所の床屋さんや喫茶店の壁に作品をかけさせてもらうなどでもいいので、障がい者のアートを地域の中で受け入れてもらって、そのこども達に日が当たるようにしたい。そうして北山さんが言われたみたいにアンテナをピッと立てているところが全国各地に増えてきて、ネットワークができてきたら、何かしら動きが出てくるのではないかなと思います。

今泉 こうして美術館をつくる・場をつくると言い続けられれば、いつかはできると思います。こうして福祉関係者や、美術関係者、色々な人が話を進めていける場が、これからもっと必要だと思います。

山口 皆さん本当にありがとうございました。今回の事業は、愛知県の心のバリアフリー推進事業という助成金を頂いてやっております。統括はNPO法人ポパイ、運営はoffice tre punteでした。以上をもって座談会を終了させていただきます。みなさま本日はありがとうございました。



愛知県心のバリアフリー推進事業  
**MO-YA-COアートプロジェクト2012**  
**workshop&talk**  
～アートでひらく・ひろげる3日間～

---

主催：愛知県（健康福祉部障害福祉課）

企画統括：NPO法人ポバイ

企画運営：office tre punte

STAFF：NPO法人ポバイ（担当：長谷川貴大）

協力：社会福祉法人無門福祉会「青い空」、NPO法人かわせみ「かわせみ工房」

記録誌制作

デザイン：芝裕子（office tre punte）

写真：亀山よう子、神森珠美、芝裕子（office tre punte）、林裕己

編集：亀山よう子、神森珠美（office tre punte）、高橋由子（NPO法人ポバイ）

発行日：2013年1月

発行者：NPO法人ポバイ

〒462-0024 名古屋市北区鳩岡2-7-1とよビル平成103号

電話 052-508-9035 FAX 052-981-8808

<http://mo-ya-co.info/>